

VIII おわりに ―― 第4の裏切りについて

先にも触れたように、日本テレビは本件放送が問題化したことを受け、代表取締役社長を委員長とする「番組制作向上委員会」を設立し、番組制作全般を見直す大がかりな改革に乗り出している。

これには、やはり委員会が審議した2012年4月放送の『news every.』の「食と放射能 飲み水の安全性」報道、2011年1月放送の『news every. サタデー』の「ペットビジネス最前線」報道と、不祥事が相次いでいたという事情もあったにちがいない。制作部局がちがうとはいえ、1年余りのあいだに3件の不祥事というのは過去に例がなく、関係者一同の危機感と覚悟のほどもひしひしと伝わってくる。その改革に向けた決意と全社的な体制の構築の努力については、委員会としても高く評価したい。

しかし、当たり前なことだが、その改革の方向性も内容も、すでに犯してしまった失敗をどのように総括するか規定される。その原因を正確に、深く把握しなければ、再発防止策も全般的な改革も的外れのものになる。私たちが本件放送の実際の内容・演出手法と制作者の認識・説明の落差に着目して検証したのも、関係者が今回の不祥事の真因を直視し、たしかな改革へと結びつけてほしいと願うからであった。

最後にひとつ、大事なことを指摘しておきたい。私たちは本件放送の制作者の認識・説明が実際の放送内容とかけ離れ、不適切な演出手法を採った動機を過失や迂闊の側にずらしていることを指摘したが、このことは別の言い方をすると、制作者が自分自身を裏切っているということである。自分がやろうとしたこと、やったことから目をそらし、意味や意図を変えてしまう。これは、視聴者、出演者、他局同業者に対する裏切りにつづく第4の裏切りである、と言わなければならない。

ものを表現し、ものを作る人間がみずからを裏切ったら、クリエイターとしての存在の根拠を失ってしまう。これはまたせつかくの改革の方向性と内容をゆがめもするだろう。それは制作者や日本テレビにとってだけでなく、日本の放送文化にとっても大きな損失となる。

委員会は今回、故意や裏切りなどと、人間の情動に強く結びつく言葉を使いながらこの意見書をまとめた。それは、放送で失ったものは放送で取り返すしかない、放送の自主・自律を貫くのも制作者一人ひとりの努力である、という私たちの信念を、本件放送の制作者と、改革さなかの制作現場の一人ひとりの胸の内に届けたいと考えたからであった。どうかここに込めた私たちの思いを汲み取っていただきたいと思う。